

単独感触と二重感触：コウルリッジにおける感覚と幻想

Takayama, Nobuo / 高山, 信雄

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

118

(発行年 / Year)

1976-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005210>

単独感触と二重感触

— コウルリッジにおける感覚と幻想 —

高山 信雄

1. 詩的幻想

詩人が詩作する場合、過去あるいは現在の体験や経験を材料にして、それに詩人特有の奔放なる想像力を駆使し、ときには未来の希望や予言すらも表現する。したがって、多くの詩人にとっては、外部的な刺激が詩の源泉として非常に重要な役割を果す。

この外部的刺激は、感覚を通して得られるものである。詩人にとって、特に重要な感覚は視覚である。視覚に映じた像は、詩人の精神に作用して、その詩人独特の形象として詩の中に再構成される。このことは、他の感覚、すなわち聴覚・臭覚・触覚・味覚についてもまったく同様である。

およそ人間の感覚のうちで、視覚はもっとも優れている。遙遠なる夜空の星も地に這う微少なる蟻も、真昼の眩耀にも新月の微光にも、人間の目はよくその機能を発揮する。しかも自然のままに対象を視覚化できる。こうした能力は、他のほとんどの動物に欠けるものであって、まさに人間独自の特性の一つと言っても過言ではあるまい。

対象を感覚し得る距離的能力からすると、視覚は第一位である。実に無限遠といえる距離にある対象すら感知できる。これに聴覚が次ぐ。やや遠方の音も聞くことができる。臭覚になるとずっと近くに限定される。聴覚や臭覚が人間より優れた動物はいくらもいる。触覚はせいぜい手の届くところにしか及ばない。味覚は口腔の舌に限定される。しかしながら、こうした距離的な感覚能力が、詩人の受ける感覚的刺激の大きさに比例するわけではない。むしろその逆ではないかとも思われる。視覚は人間に備わった最優位の感覚であるという理由からもっとも多く活用されるのであるが、刺激はこれとは逆に、味覚において、すなわち舌での感覚がもっとも強烈であり、五体の一部に触れる触覚がこれに次ぐ。

19世紀のロマン派詩人の多くは、いわゆる視覚から詩的形象を得ていた。ワーズワスもその一人である。彼の詩には、感覚的想像力により視覚的記憶から再生された詩が多い。すなわち、視覚的過程を踏んで外界から取り入れられた詩的イメージが、もう一度頭脳内のスクリーン上に、デフォルメされモディファイされて再生されるのである。この現象を幻想あるいは幻視と言ってもよいであろうが、その主たるモチーフは視覚映像にあることは確かである。

こうした視覚的詩人とは別に、触覚によっても詩作のモチーフを得る詩人がいる。それだけに刺激は強烈で印象的である。コウルリッジは、こういうタイプの詩人のうちでも、もっとも顕著な詩人であるといえよう。彼の詩にみられる「魔力的なもの」、あるいは「超自然的なもの」は、この触覚によって喚起され想像力によって再構成されて、さらに詩人の精神によって活力を与えられたものである。

コウルリッジの詩的幻想は、主として「眠っているときの、半意識的・準意識的なからだの状態」¹⁾から生ずるのである。そこでは、ふだん意識下に潜んでいる無意識があらゆる束縛から解放され、それが外界からの感知的な刺激により喚び戻され、活発な想像力の作用によって視覚化される。コウルリッジが触覚を重要なものであると考えたことは、1815年にワーズワスに宛てた次の書簡にも明らかである。

I supposed you first to have meditated the faculties of Man in the abstract, in their correspondence with his Sphere of action, and first, in the Feeling, Touch, and Taste, then in the Eye, & last in the Ear, to have laid a solid and immoveable foundation for the Edifice by removing the sandy Sophisms of Locke, and the Mechanic Dogmatists, and demonstrating that the Senses were living growths and developements of the Mind & Spirit in a much juster as well as higher sense, than the mind can be said to be formed by the Senses—²⁾

コウルリッジが感覚と精神との関連について重要な意義を認めるに至った過程には、さまざまな経験があったようである。感覚のうち、とりわけ触覚については格別の関心があった。触覚の重要性について最初に述べているのは、1801～2年の『備忘録』の中である。

motion communicated to the object by any motion in any part of

the body. ex.gr. of the hand moving to & fro the flesh of the Leg. — This important.³¹

しかし、コウルリッジが感触作用を体験的に詩に表現したのは、これよりずっと早く、すでに1798年に『抒情民謡集』に載せた『老水夫の歌』において明白である。夢の中での感触については、さらに以前に遡ることができる。コウルリッジは病苦を柔げるために服用した阿片の効果より生ずる心的状態の下で彼自身の肉体の犠牲において、感触作用によって、ますます鋭くますます強烈に、しかも一層幻想的な形象を生ずるようになっていった。

2. 感触の効果

1819年の春、詩人ジョン・キーツがロンドン郊外のハイゲイトを散歩中に、偶然に医師のギルマン宅に住んでいたコウルリッジと出会った。そのときコウルリッジはキーツと共に散策しながら、夢魔や触覚を伴う夢の話、それに単独感触と二重感触の話をした、とキーツはその書簡の中で述べている。³² この頃にはすでに、コウルリッジには感触作用の詩的重要性が体系化されていたのである。

コウルリッジが考えた感触作用の効果は、どんなものであったろうか。彼は『備忘録』の中で、こう書き留めている。

Important metaphysical Hint the influence of bodily vigor and strong Grasp of Touch in facilitating the passion of Hope:³³

またさらに『備忘録』の中には、感触に関して次のように説明している個所がある。

The imperfection of the organs by which we seem to unite ourselves with external things — the tongue, the palate, the Hand — which latter becoming more *organic* is less passionate /now take an organ as the highest exponent of passion with the least possible machinery of power, that is, the most Feeling, the least Touch, & no Grasp/it can only suit a universal idea/consequently dim—& one by the dimness/however complex it may or may not be. Observe that in certain excited states of feeling the knees, ancle, sides & soles

of the feet, become organic/Query — the nipple in a woman's breast, does that ever become the seat of paticular feeling, as one would guess by its dormancy & sudden awakings —⁶⁾

身体の一部の感触は、ほんのわずかなものであっても、詩作の原動力となる感情の高揚が得られるものである。

子供にとって感触が如何に重要な効果をもたらすかを、コウルリッジはよく知っていたし関心もあったようである。

Nov. 18 — Derwent had tears in his eyes when he cried — Miss W. touched his face with her cold hands.

Hart. seemed to learn to talk by touching his mother[...]⁷⁾

コウルリッジは息子たちに及ぼす感触の効果を細心の注意をはらって観察した結果、それが感情を大きく支配することを再認識するのである。

Attention/from greater to a lesser, explained by the Taste & Touch — i.e. fruition, so small in surface of Space, compared with the eye & ear.⁸⁾

これも『備忘録』に書かれた一文であるが、触覚や味覚に対するコウルリッジの関心の深さが伺えるものである。

このように、コウルリッジにあつては、感触は人間一般に及ぼす普遍的効果のほかに、さらにそれは詩的体験を具現化する媒体としての効果を認めるものとなる。すなわち、触覚がもつ生物的效果からはじまって、さらに幼児が示す親しい人の感触に対する歓喜や安堵の感情から悪夢にさいなまれる原因となる感触までの、さまざまな効果を熟考し研究したのちに、コウルリッジはこれを精神との関連における重要な形而上学的要素と考えるに至ったのである。

ほんのわずかな感触でも、そこから誘発される感情にはすこぶる激しいものがある。特にそれは、睡眠状態——とりわけ半意識的な状態——においても著しい。すなわちこの状態では感触を感知できるが、それに視覚の影響はまったく存在しないので、視覚による先入観的效果はまったくなく、すこぶる自由で奔放な幻想が得られることになる。

3. 二重感触

コウルリッジにあっては、触覚の効果を芸術的素材としての幻想体験にまで高めるものは二重感触 (double touch) の作用である。二重感触とは、視覚の作用がない状態で触覚だけで或る物体の存在を感覚するとき、それを現実の形態とは異なるものとして感じとる作用である。この場合、一個の物体でも、ときには二個と感ずることがあるので、コウルリッジはこの感触効果を二重感触と名づけたのである。トム・ウェッジウッドが記している二重感触の説明によると、目隠しをして人差指と中指の指先を交叉させた状態で触れると、一つのものが二つに感じられるという。こうした実験は誰がやっても同じであろうと彼は信じている。彼はこう言う。

A person is blindfolded, and desired to attend to the impression of touch from a body so placed; the bandage being removed, he is directed to look at his fingers, while the object is placed as before. He will say, that the first time he felt two bodies at a distance from each other, and that now he feels only one... As the sensations of touch from the same impressing body must have been the same in both cases, the supposed difference in them must have been owing to some circumstance of vision: in the first case, the experimenter was deceived by a visual idea; in the second he was rightly informed by a visual impression.⁹⁾

すなわちこの二重感触が作用する状況にあっては、感覚によって直ちに或る観念を惹起するが、それは感覚と観念とに共通する性質があるからである。現象界に存在する物体の認識には、当然視覚にもっとも信頼がおかれる。しかし視覚に映じた客体は、形状・大きさ・色彩などが固定化されて、もはや触覚は第二義的なものでしかない。ところが視覚の助けなくして物体を触知するとき、そこには感触より生ずる別の観念が湧いてきて、その対象物を想定する。この感覚作用と観念作用が一体となって、対象物の認識が可能となる。したがって、ときには二重感触作用で触知した客体は、視覚的存在物とは大きく遊離した幻想となる場合がある。しかもこの幻想は意志力の作用によって発展的連続的な推移をする。『文学評伝』第一二章に、“the sensation of volition, which I have found reason to include under the head of single and double touch.”¹⁰⁾ と書かれているが、コウルリッジはこの意志力の感覚作用

を、意志すなわち実践的理性・選択の能力などと並列して、すべての知識の中に統一や必然性や普遍性を作り出す力として考えた。コウルリッジはこれを非常に重要な先験的原理として捉えていたことは、同様の説明が『アニマ・ポエタ』・『雑録集』その他¹¹⁾に引用されていることからわかる。

意志力の感覚作用はこのように単独および二重感触作用の範疇に含まれるものであるとコウルリッジは考えるに至ったのであったが、それは取りも直さずこうした感触作用が主観的精神活動における感覚能力を為すことを認めたものである。すなわち、コウルリッジは感触作用を単に現象を感知する器官の作用に止めることなく、哲学的意味を有する能力として、形而上学的あるいは先験哲学的な原理にまで高めたのである。コウルリッジは次のように記している。

Of the intimate connection of Volition, and of the Feeling & Consciousness of Volition, on the state of the Skin, I have noticed long ago in a former Pocket-book, occasioned by the curious phenomenon experienced the X^tmas of 1801 at M^r Howel's, N^o 10, King S^t, Convent Garden, my Skin deadened, the effect of violent Diarrhœa/My Speculations thence on double Touch—the generation of the Sense of Reality & Life out of us, from the Impersonation effected by a certain phantasm of double Touch, & c & c & c, and thence my Hope of making out a radical distinction between this Volition & Free Will or Arbitrement, & the detection of the Sophistry of the Necessitarians/as having arisen from confounding the two.¹²⁾

上記引用のように、コウルリッジがこの体験をしたのは1801年のことであったが、すでにその頃に二重感触作用をもって意志力つまり意欲と自由意志との明確な区別をしようと考えていたのである。この二重感触作用は、コウルリッジが述べているように激しい下痢で皮膚の感覚がなくなったときに経験したものであるが、この状態においては皮膚は通常の感触とは別な観念を導く作用を営んでいるのである。通常の皮膚感覚が消失した状態は、たとえば乗物酔いや麻薬摂取のときなどにもしばしば生じるものであるが、睡眠中にもっとも頻繁に現われる。彼はこの日の経験から、二重感触作用の幻想の具現化によって主観的实在感覚が生ずるのを見出したのであった。

コウルリッジはまた、二重感触作用に関して、こうも記している。

Touch — double touch / ¹ Touch with the sense of immediate power
² with retentive power — ³ retentive power extinguishing the sense
 of touch, or making it mere feeling — & the gradations preceding this
 extinction / ⁴ retentive power simply, as when I hold a thing with
 my Teeth / ⁵ with feeling not Touch in one part of the machinery,
 both in the other, as when I press a bit of sugar with my Tongue
 against my Palate / ⁶ with feeling & even touch but not specific
stimulari (esse sub stimulo) as when I hold a quill or bit of fruit
 by my lips — ¹³¹

コウルリッジの考える二重感触とは、このように直視力のある感触であり、保持力をもつ感触である。そしてさらに触覚を消失させ単なる感情だけを生ぜしめる保持力をも有するものである。コウルリッジが二重感触作用をこのように多面的な作用として捉えたのは、感触の効果によって特定の感情が生ずるまでの全過程に作用するものをすべて念頭に入れたからである。

4. 夢と感触

コウルリッジにあっては、夢と感触との関係は非常に重要な意義をもつ。感触が感情に大きな作用を与えるのは、一般的な夢 (Dream) におけるよりも幻想夢 (Night-mair) においてである。通常意識下に潜んでいる過去の経験と感触効果とが結びついて、何か得体の知れない形象や観念を生ずると、それは夢魔として現われる。下層意識が解放され記憶が自由に闊歩する場で、あの奔放で潤達な想像力の作用により、奇抜で凄愴なる状況や、ときには卓越した不可思議な形象などが、創造され形成される。

その力の作用する場は、意識が完全なときでもまったくないときでもなくして半ば意識的感覚状態であるが、形象は鮮明で新鮮であり、しかも記憶によく保持される。コウルリッジは夢魔には悩まされていたのであるが、皮肉なことに、それが彼の詩的体験の世界としてもっとふさわしく且つ重要なものであった。『備忘録』中に次の覚え書きが見られる。

Night-mair is, I think, always — even when it occurs in the midst of Sleep, and not as it more commonly does after a waking Interval, a state not of Sleep but of Stupor of the outward organs of Sence, not in words indeed but yet in fact distinguishable from the

suspended power of the senses in true Sleep ; ...¹⁴

コウルリッジはここで、睡眠状態において外界を感知する感覚器官が昏迷の状態に幻想夢が生ずるとして、感覚器官が眠っているときには生じないと考えている。彼は言う。

This stupor seems occasioned by some painful sensation, of unknown locality, most often, I believe, in the lower Gut, tho' not seldom in the Stomach, which withdrawing the attention to itself from its sense of other realities present makes us asleep to them indeed but otherwise awake —¹⁵

ここでわかるように、苦痛が感覚の昏迷を生ずる原因となるが、とりわけ腹部によるものが多いという。コウルリッジの幻想夢はこのように感覚器官、主として触覚が、昏迷の状態において生ずるのだが、これは腹部だけが原因でなく、歯や手足についても同様である。

— and when ever this derangement occasions an interruption in the circulation, aided perhaps by pressure, awkward position, & c, the part deadened — as the hand, or his arm, or the foot & leg, on this side, transmits double Touch as single Touch : to which the Imagination therefore, the true inward Creatrix, instantly out of the chaos of the elements < or shattered fragments > of Memory puts together some form to fit it —¹⁶

このように睡眠中の身体的位置によっても、或る種の感覚状態が各部位に引き起こされることもある。そうした状態では、二重感覚が単独感覚のように脳に伝えられるのであって、その状態において、あの内なる創造の女神想像力が活躍して、その混沌としたものを一つの全体としてまとめるのである。

胃が皮膚感覚に重要な役割を果しているというコウルリッジの考えは、次の覚え書きにも見られる。

Mrs. C. told me, Monday Night, May 9th, that since she had had the Influenza, & her Skin had been evidently affected by the State of stomach, that the Baby lying on her arm < often > seemed two

Babies — she not <absolutely> asleep—both on the same side — & that she often seemed to have two Breasts on the same side.—¹⁷

コウルリッジ自身ばかりでなく、妻のセアラも胃の状態によっては二重感触を感じたと話しているのであるから、彼にとっては二重感触は普遍的な原理であるという確信を深めたに相違あるまい。

コウルリッジは、いわゆる Dream と Night-mair とを区別している。Night-mair (コウルリッジは Nightmare と綴らず Night-mair とした) は『文学評伝』の第18章の註にあるように、Night-sister あるいは Night-hag の意味であって、共に女性の意味をもつ。コウルリッジのこの種の幻視あるいは幻想は実に多岐にわたる。優しい女性、顔馴染の女性、恐い女性などさまざまな女性像が幻想の中に現われる。

二重感触がひき起こされる身体的状態は、外界を感じとる器官の機能の昏迷した状態であるが、これは睡眠中のみならず船酔いするときにも生ずることがある。コウルリッジはこのように記している。

Sea sickness, the Eye on the Stomach, the Stomach on the Eye / — Eye + Stomach + Skin — Scratching & ever after in certain affections of the Skin, milder than those which provoke Scratching a restlessness for double Touch/Dalliance, & at its height, necessity of Fruition. — Fruition the intensest single Touch, & c & c & c ;¹⁸

船酔いしたときの胃の状態は、皮膚感覚に特別の状態をもたらす。胃に神経が集中して、あたかも胃に視覚的效果をもたらすように感じられる。

二重感触作用には、特別な身体状態が前提となるから、誰もがいつでも触知できるものではない。単独感触とはこの点が相違する。詩人コウルリッジにしてはじめて、その効果を有効に活用できたのである。

5. 詩的創造の源泉

単独感触および二重感触作用は、コウルリッジの詩作において非常に重要な要素となっている。Night-mair における感触は、理性の束縛から解き放たれた感情を思うままに刺激して、あるときは崇高にして華麗なる女性を、あるときは恐怖と怪奇に満ちた形象を、あたかも実在せるが如くに詩人の内に顕現する。そしてそれが人には想像も及ばぬ幻想的にして怪訝なる物語を生み、霊

妙にして幽玄なる情景を再現する。そこに作用するのは詩人の統一力であり構成力であるあの崇高なる想像力である。想像力は斯くして二重感触によって活動の場を与えられ、その持てる最高能力を発揮できるのである。

深遠玄妙な詩『老水夫の歌』に見られる超自然的ゴシシズムの美は、実にコウルリッジの幻想の追体験より生じたものである。如何に詩人の見た幻視が奇抜であっても、それがまとまりある全体に再構成されない限り芸術作品とはいえない。想像力が調和的に作用してこそ、はじめて詩としての形態をとる。この詩の内容は、コウルリッジにあっては単なる妄想ではないし、また現実とまったく無縁のものでもない。さりとして現実的實在そのものでもないことは明白である。それは現実界を基礎にして二重感触作用の効果と想像力との相乗積によって創り出された詩人の現実の形象の描写である。したがって、詩人の得た幻想と現実とが調和した形態が詩であるといえる。

コウルリッジにしばしば散見せられる Night-mair の実例が、『老水夫の歌』にもある。

*Her lips were red, her looks were free,
Her locks were yellow as gold :
Her skin was as white as leprosy,
The Night-mare LIFE-IN-DEATH was she,
Who thicks man's blood with cold.*¹⁹⁾

これは疑いなくコウルリッジが Night-mair に見た女性の描写である。恐怖と暗黒の世界の象徴に、女性の姿をもってする。生と死と対立の中で苦悩する老水夫の見た現実を、コウルリッジその人の仮幻でなくてむしろ現実であり、冷厳なる芸術の世界に具現化され詩人の魂でもある。

コウルリッジの怪異玄妙にして神変不可思議なゴシシズムは、独り怪奇性のみならず豊かな抒情性と真摯な詩魂と新鮮なる詩風により森厳なものとなっている。

神々妙々なる詩風を代表するもう一つの詩『クリスタベル』にも、生々しい詩人の体験が滲み出ている。Night-mair における可憐純情なる乙女と醜悪怪奇な魔女は、そのまま詩の中でのクリスタベル姫とジェラルダインに具現化される。二重感触作用の結晶であり、想像力の所産である。

*And now the tears were on his face,
And fondly in his arms he took*

Fair Geraldine, who met the embrace,
 Prolonging it with joyous look.
 Which when she viewed, a vision fell
 Upon the soul of Christabel,
 The vision of fear, the touch and pain!
 She shrunk and shudered, and saw again —
 (Ah, woe is me! Was it for thee,
 Thou gentle maid! such sights to see?)

.....

The touch, the sight, had passed away,
 And in its stead that vision blest,
 Which comforted her after-rest
 While in the lady's arms she lay,
 Had put a rapture in her breast,
 And on her lips and o'er her eyes
 Spread smiles like light! ²⁰⁾

これはまさに詩人コウルリッジの実体験のデフォルメに外ならない。感触と苦痛、それに恐怖の仮幻。これは詩人にとって幻覚というよりむしろ現実なのである。

二重感触作用による仮幻すなわち視覚的形象は、まったくの夢の状態ではなくして、意識が働く状態に近い Night-mair において現出する。このような状態の下では、無意識すなわち下層意識と半ば目覚めている感覚作用とによって幻視がもたらされる。コウルリッジ自身はこの状態を reverie と呼んでいたが、この reverie の状態こそ、詩人コウルリッジにあっては芸術の温床であり根源であった。

視覚の助けを借りる単独感触にあっては、実体を実体として認識するのだが、その際その対象と何らかの精神的交流があれば、その刺激は感触によって倍加される。例えば愛する人の優しい手から伝わる感触は、歓喜と快感の感情を誘発し、しかも物理的刺激は去ってもその感情は保持され持続する。そしてそこからも詩的情緒が生まれる。

一方、二重感触においては、外界の実体の大きさとは係りなく、空間的な広がりにおいて認識される。したがって、そこには現実離れた『クッブラ・カン』のような、神秘的な幻想の世界が開けてくるのである。

このように、単独および二重感触は共に詩作の源泉であるが、二重感触効果を体系化して詩という芸術にまで高めたのは、コウルリッジを似って嚆矢となすものである。

註

- 1) *The Notebooks of Samuel Taylor Coleridge*, ed. Kathleen Coburn (Princeton, 1961), Text, II, 2073.
- 2) *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. L. Griggs (Oxford, 1959), IV, P. 574.
- 3) *Notebooks*, Text, I, 1039.
- 4) *Letters of John Keats*, ed. H. H. Rollins (Cambridge, 1958), II, 89.
- 5) *Notebooks*, Text, II, 2398.
- 6) *Ibid.*, II, 2399.
- 7) *Ibid.*, I, 838.
- 8) *Ibid.*, I, 1399.
- 9) *Notebooks*, Note, I, 1827.
- 10) S. T. Coleridge, *Biographia Literaria*, ed. J. Shawcross (Oxford, 1967), P. 194.
- 11) *Notebooks*, Note, I, 1827.
- 12) *Notebooks*, Text, I, 1827.
- 13) *Ibid.*, II, 2399.
- 14) *Ibid.*, III, 4046.
- 15) *Loc. cit.*
- 16) *Loc. cit.*
- 17) *Ibid.*, I, 1188.
- 18) *Ibid.*, I, 1827.
- 19) *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. H. Coleridge (Oxford, 1968), P. 194.
- 20) *Ibid.*, P. 230.